

〔共同研究報告〕

## 「Casa da Musica 及び東京文化会館との教育連携 による音楽指導力育成事業」報告

朝日公哉<sup>1)</sup> 岩田恵子<sup>1)</sup> 中村岩城<sup>2)</sup> 渡辺明子<sup>2)</sup> 村井伸二<sup>3)</sup>

### Report on the “Project to Develop Music Teaching Skills through Educational Collaboration with *Casa da Musica* and Tokyo Bunka Kaikan”

Koya Asahi, Keiko Iwata, Iwaki Nakamura, Akiko Watanabe, Shinji Murai

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.  
*Tamagawa University Research Review*, 29, 31-38 (2023)

#### 要 約

小原國芳教育学術奨励基金の助成によって実施された2022年度の事業報告。東京文化会館のスタッフによる講演会を開催しミュージックワークショップの沿革や理念を理解した。また、東京文化会館ミュージックワークショップのリーダーを招聘し学生や幼稚部園児を対象にワークショップを実施した。これらの事業内容を教育的視点からの考察を加えまとめた。その結果、東京文化会館ミュージックワークショップは「誰もが簡易に参加でき、それが豊かな音楽体験へ発展すること」「音楽の絶対価値から喜びが得られること」「皆で音を合わせる楽しさを味わうこと」を重視する特徴をもっていることがわかった。

#### Abstract

This is a report on the project for AY2022 carried out with a grant from the Kuniyoshi Obara Fund for the Promotion of Education and Academic Activities. We hosted a lecture by the staff of the Tokyo Bunka Kaikan to understand the history and philosophy of the music workshops. Furthermore, we invited leaders of the Tokyo Bunka Kaikan Music Workshop to conduct sessions for school students and kindergarten children. We summarized these details of the project from an educational perspective. The result showed that the Tokyo Bunka Kaikan Music Workshop has the following features. Participation in the workshop is easy for everyone, which leads to a rich music experience for the participants. In addition, the absolute value of music provides the participants pleasure. Finally, the workshop allows everyone to enjoy the fun of making music together.

キーワード：東京文化会館, Casa da Musica, 音楽指導力

Keywords：Tokyo Bunka Kaikan, *Casa da Musica*, music teaching ability

---

1) 玉川大学教育学部乳幼児発達学科  
2) 玉川大学芸術学部音楽学科  
3) 玉川大学TAPセンター

## 1. はじめに

本学教育学部及び芸術学部音楽学科と公益財団法人東京文化会館は「ミュージック・プログラム・トーキョー Workshop Workshop! ～国際連携企画～」として2021年度より教育連携を締結している。本報告書はその一環として実施された小原國芳教育学術奨励基金の助成による2022年度の事業内容をまとめたものである。

公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化会館では Casa da Musica (ポルトガル) を中心に国際連携企画としてミュージック・ワークショップのワークショップリーダー育成プログラムを展開し、これまで多くの優れた人材を輩出してきた。2005年に創設された音楽施設 Casa da Musica は“音楽は芸術であると同時に人々の心の豊かさを育むもの”という理念のもと教育普及活動を行ない、欧州におけるエデュケーション・プログラムの先駆的な取り組みを続けている。この内容は、技術の習得よりも学習者の音楽に対する関わりを主体に構成されており、玉川学園の教育理念に合致する点が多く見られる。玉川学園における音楽教育は全人教育理念と統合しながら特に「生活音楽」として根付いている。しかしステージ音楽と一線を画す「生活音楽」は即時的な成果を客観的に認めづらく、何ができるようになったかを明確に求められる成果主義の風潮の中で、改めてその意義が見直されている。Casa da Musica は音楽の絶対価値であるリズム・メロディ・ハーモニーの教育効果を最大限に活かす点において特徴的であり、本学の音楽教育の礎を築いた岡本敏明の目指した理念と共通している。更に Casa da Musica のプログラム内容は学習者主体の音楽活動でありながら客観的な魅力があり、東京文化会館のワークショップ・コンサートでは参加チケットが即完売するほどである。この連携事業を通して全人教育における音楽教育の特質を踏まえた指導者の育成や、教育理念に根ざした教材及びプログラムの再編は玉川音楽の発展に大きく貢献するものとして期待されている。

## 2. 事業内容

具体的活動内容は東京文化会館事業企画課スタッフの招聘による講演(2022年6月)、学生を対象としたワークショップ「One Day セッション」(2022年6月)の実施、幼稚園園児を対象とした「ムジカ・ピッコラ」(2022年9月)、「タネまき、タネまき、おおきなあれ！」(2023

年2月)の実施である。ここでは事業の概要と教育的視点から考察を加える。

### 2.1 東京文化会館事業企画課福井千鶴氏の講演

2022年6月30日教育学部の学生を対象に東京文化会館事業企画課福井千鶴氏を本学に招聘し「芸術が社会に果たす役割～カーザ・ダ・ムジカと東京文化会館の共同事業を通して」というテーマで講演会を開催した。福井氏はポルトガルの Casa da Musica と東京文化会館を繋ぎ、ミュージックワークショップの創始者の一人として事業に携わってきた人物である。

#### 2.1.1 東京文化会館のステイトメント

東京文化会館では社会的役割について「より多くの人々に集い親しまれる劇場へ」というスローガンを掲げている。「舞台芸術の入り口から本格的な芸術鑑賞への橋渡し」と「参加交流」できる「広場」となり、「社会包摂」のための「居場所」となることがステイトメントである。演奏会ホールとしてただ施設の提供をするだけでなく、文化事業としての役割と立場を意識的に担っているということを講話から理解できた。

#### 2.1.2 Casa da Musica のスローガン

東京文化会館のミュージックワークショップ創出のきっかけはポルトガル Casa da Musica にある。音楽施設として2005年に設立された Casa da Musica は「最大限の市民に音楽体験の機会を与える」という趣旨のもと音楽家・専門家・アマチュア・子供・高齢者・障害者等のあらゆるコミュニティと音楽を繋ぐ役割を果たすことを使命としている。このような施設としての土壌が東京文化会館と酷似していることに福井氏が着目したことに端を発する。また、Casa da Musica には「他の文化施設や教育機関へのコンセプトを提供し、その共有と発展に助力する」というスローガンが建てられていることによって、今日まで連携が継続できていることを知ることができた。

#### 2.1.3 東京文化会館ワークショップの課題

東京文化会館では、ワークショップリーダー育成とワークショップの実施について10年の実績を積み上げてきた。その中で今後も更に発展し続けるために、次の課題を示している。これまでも「社会包摂」を謳いイン

クルーシブに参加対象者を捉えて展開されてきたが、東京文化会館に自力で来館できない人も含めた「社会的弱者」に向けた活動を積極的に行うこと。また様々な機関・団体との連携とインテグレーションによって更に豊かに展開させるということである。これは前節でも示した Casa da Musica の「他の文化施設や教育機関へのコンセプトを提供し、その共有と発展に助力する」というスローガンを東京文化会館としても実践するということがあり、このことによって本学とも教育連携が実現することができているということを再確認した。

## 2.2 学生対象のワークショップ

東京文化会館より古橋果林氏、磯野恵美氏を玉川学園に招きワークショップ One Day Session を実施。教育学部の学生が参加した。このワークショップは歌・ボディパーカッション・リズム楽器の演奏を通しアンサンブルの楽しさを味わうプログラムである。

### 2.2.1 リーダーによる演奏

前説や挨拶の前にまずは2名のリーダーによる演奏からプログラムはスタートした。曲目はモンティ作曲『チャールダッシュ』。誰もが耳にしたことのある著名曲であることと快速なパッセージで音楽に興味がない子どもでも音楽の世界に引き込む配慮がなされていた。元来マンドリンのために書かれた曲であるが、ヴァイオリン曲やピアノで演奏されることが一般的な楽曲である。今回はフルートとピアノ、また、要所で鍵盤ハーモニカを使って演奏された。リーダーによるオリジナルアレンジが施される点においてもこのワークショップの特徴と言える。

### 2.2.2 ボディパーカッション

2名のリーダーを含めた参加者がサークルを作りリーダーの動作を真似することでゲーム感覚でボディパーカッションを行う。言葉による指示は最小限にとどめ、身体による伝え合いから音によるコミュニケーションへ発展する。次に様々なリズム動作による創作活動となり、リーダーの掛け声に合わせて「ワン→手拍子」「ツー→足踏み」をリーダーの叩くカホンのリズムにのって演奏する。「スリー→ジャンプ」「フォー→回転してフォーと叫ぶ」は学生から動作のアイデアを引き出し、いつの間にか参加者は創作を担っていた。「フォー→回転して

フォーと叫ぶ」はその他の動作に比べ動作に時間かかるため、基軸となるカホンのテンポをおとしていた(写真1)。一方的に指示を出すのではなく、参加者の達成度に寄り添いながらリードしていることがわかる。徐々に隣同士の相手と行うペアワークを取り入れ(写真2)、更にはペアワークの相手をシャッフルすることで同じ空間にいる参加者同士が打ち解け合うアイスブレイキングの要素が見られた。



写真1 参加者に寄り添うリーダー



写真2 ペアワークの様子

### 2.2.3 動作付き Round

Round とは所謂輪唱のことで、玉川学園でもその教育効果を認め多用している。ここではコーラスライン『One』を模したワークショップリーダーオリジナルの曲を使用し、範唱から模唱を繰り返しながら参加者がフレーズを覚えていく。更に全員の斉唱を繰り返す中で各フレーズに連動して特徴的な動作を加え、全身を使うことで一層暗唱の充実を図っていた。十分に演奏が定着したところで小グループに分け、輪唱へと発展する。各フレーズに動作が付随していることで他のグループにつられにくくしている点も工夫の一つと言える。音楽の絶対価値であるリズム・メロディ・ハーモニーの楽しさと同時に動作をつけたことによってヴィジュアル的にも楽



### 2.3.2 マエストロ登場

派手な燕尾服と、いかにも音楽家と思わせるかつらを被ったマエストロが登場。足踏みと手拍子でリズム遊びを促す。子ども達が奏でるリズムに合わせリーダーはフルートでシューマン作曲「珍しいお話」を演奏。簡易なリズム活動でプロの演奏家と一緒に演奏に参加する喜びを味わえる。

### 2.3.3 フルード演奏の鑑賞

聴き慣れないフルートの演奏を生で聴く体験をプログラムの序盤に取り入れているのは、子どもが集中力を維持している中で、本物のクラシック音楽をじっくり鑑賞するという狙いがあると考えられる。今回はピアノ伴奏によりビゼー作曲アルルの女より『メヌエット』を取り上げた。ここでも耳馴染みのある名曲を扱い、クラシックをより身近なものとして感じられるようにフルートの音色の美しさが引き立つ楽曲を選曲していることがわかる。

### 2.3.4 クラシック曲でリトミック

子どもは着座のままシューマン作曲、子供の情景より「見知らぬ国」に合わせてリトミックを行うプログラム。フルートやヴァイオリンの演奏する真似をしたり指揮者のように音楽に合わせて腕を揺らしたりした。演奏に合わせて身体運動を行うという即時反応が求められリトミックの基本的な要素を呈している。

### 2.3.5 オノマトペを使ったアンサンブル

ハイドン作曲『交響曲 94 番 驚愕』の 2 楽章を使い、オノマトペを使って演奏に参加するプログラム。4 つのモチーフ①「ホッホッ」②「舌鼓」③「シッシッ」④「ハー」を 4 拍子のリズムに合わせて声を出す。声を使うことは簡易であるが、幼児にとって歌にしてしまうと「音程」とらわれのびのびと歌えなくなってしまう恐れがある。音程を気にせず口によって音を出しリズム重視でアンサンブルを楽しむために擬声語を活用していることがわかる。また「驚愕」というタイトルの由来にもなっている聴衆を驚かせるパートでクラクションやヴィブラスラップ・シャウティングチキンなどを順番に使い子ども達を驚かせた（写真 5）。次第に次はどんな音がするのか興味を膨らませる工夫である。最後にはオフステージ（今回は客席の横）に設置したバスドラムを参加者側の関係者（今回は学生と参加園児の担任）に叩かせた。

大きな音と叩いている人の意外性で、二重に驚きが生まれる。

### 2.3.6 スカーフを使ったリトミック

カラフルなスカーフが全員に配られ、その間ピアノによりヨハン・シュトラウス作曲『美しく青きドナウ』が演奏される。子ども達は音楽に合わせてスカーフを揺らす。

プログラム中盤で着座のプログラムが続いたため、子ども達の集中力が途切れないように、全身運動をこの段階で入れていることがわかる。幼児教材には極めて 3 拍子の音楽が少ない。ワルツのリズムに合わせて即時反応と連続する円運動を身体で感じながら表現することは貴重な経験となる。

### 2.3.7 器楽合奏（音積み木・タンバリン）

参加者に音積み木・タンバリンが配られ、子ども達は手に取ったそばからそれぞれの楽器で音を鳴らし始める。タンバリンはマレットも一緒に配られ、初めて触る幼児でも音が出やすいように工夫されていた。全員に配られたところでマエストロの指揮に合わせて演奏を休止したり、強弱を意識して叩くなど子どもの恣意的な体制を徐々に統制された状況へと導く。その後マエストロの役を子どもに担当させた。友達が指揮をとることでより一層子ども達は指揮を注視して演奏するという作法を身につけていた。こうして指揮に合わせて演奏することに充分に慣れたところでピアノによってブラームス作曲『ハンガリー舞曲』が演奏される。ハンガリー舞曲はテンポの揺れが著しい曲であり、一定のリズムで単調に演奏するのではなく、指揮に従いながら音楽のテンポの揺らぎに合わせて演奏する楽しさを味わえる。

### 2.3.8 器楽合奏（シェイカー）

続いて全員に幼児の手にすっぽりおさまるような小さなシェイカーが配られた。すっかり前パートで指揮に合わせて演奏することに慣れていた子ども達は、ピアノによるベートーヴェン作曲『運命』～『交響曲第 7 番』に合わせて次々と演奏する。その後リーダーのフルートにより『交響曲第 9 番』の主題が演奏された。次はこの「喜びの歌」のテーマを歌唱によって演奏する。「喜びの歌」は順次進行のメロディと音域の幅が狭いことが特徴で、その口ずさみやすさから採用されたことがわかる。最後は歌声に合わせてシェイカーを演奏しピアノアレンジも壮大になりフィナーレを演出している。片手で簡易に演

奏することができるシェイカーだからこそ歌唱と合わせて演奏が可能なのである。子どもたちにとって参加度が高まるほどに演奏する喜びが充実する。



写真4 ワークショップを参観する学生



写真5 シャウティングチキンで驚かすリーダー

## 2.4 幼稚部でのワークショップ「タネまき、タネまき、おおきなあれ！」

ムジカピッコラが年中・年長向けに実施されたのに対し、同伴者と共に乳児でも関われるプログラムとして「タネまき、タネまき、おおきなあれ！」を年少クラスで実施した。このプログラムは数々のコンクール受賞歴がありNHK-Eテレにも出演している箏の演奏家吉澤延隆氏とピアニスト高田有香子氏を招いて行われた。

### 2.4.1 客入れ導入

全身ネズミに扮した高田氏のウクレレ演奏による客入れ。それぞれ子ども達は保護者に手を引かれながら入場、いつもと雰囲気の違いに安心して馴染んでいけるように配慮されている。まずはリーダーの全身を使った真似っこ遊びからプログラムはスタートした。緩急をつけたポーズを連続させ子ども達から自然に笑いが生まれる。ネズミ役リーダーの呼びかけによりネコ役(吉澤氏)

が登場。

### 2.4.2 保護者と共にリトミック

保護者の膝に座りドライブに見立てたりトミックのプログラム。リーダーは保護者をリードし上下左右に揺れる膝の上でその動作を楽しんだ。その間三味線や箏の演奏でBGMを演奏。知らず知らずに和楽器の音に親しんでいた。続いてネコ役リーダーが持ってきたというプレゼントを探すリトミック。箏によるリズムカルなオリジナル曲に合わせて踊りながら参加者はプレゼントを探す。フレクサトーン<sup>5)</sup>を虫眼鏡に見立てて探し回る。何かを見つけるたびにフレクサトーンを効果的に鳴らしてコミカルな雰囲気を作り出していた。大きな器に入ったプレゼントを見つけたリーダーは「これ何か？」という歌を歌いながらリーダーと参加者のコール&レスポンスにより参加者も歌う。見つけたプレゼントは「不思議なタネ」の設定で鈴の楽器が入っていた。

### 2.4.3 スカーフを使ったリトミック

見つけたタネを蒔くための畑作りを見立てたりトミック。保護者と子ども達全員にスカーフが配られる。ピアノの伴奏に合わせてスカーフを鉤に見立てて畑を耕す動作をする。ここではピアノによるサンサーンス作曲「動物の謝肉祭」より『ライオンの行進』が使われた。続いてスカーフを広げて風を表現。拍子のないピアノのアルペジオに合わせて強弱をつけながら全身でスカーフをなびかせる。再び『ライオンの行進』に合わせて畑を耕す動作。短調の曲調もあり苦勞して畑を育てる雰囲気を演出していた。

### 2.4.4 鈴によるアンサンブル

タネに見立てた鈴が配られリーダーの指示に合わせて子ども達は鈴を演奏した。初めはジャンベ<sup>6)</sup>に合わせて音の強弱表現、やがて東欧の民族音楽のようなピアノ伴奏に合わせリズムに合わせて鈴を鳴らした。教育楽器用の鈴ではなく、猫のおもちゃとして市販されている幼児の持ちやすい楽器を使っていることが興味深い。教育楽器としての鈴では金属音がきついが、ここで使用した鈴は優しい音色でリーダーの声や伴奏が聴こえやすい。続いて種まきの動作から無事にタネが育つようにという願いを込めたおまじないの動作のリトミックへと展開する。このプログラムの特徴は、参加者と共に物語を進行することで、子ども達がその世界へ没入していくことを

狙いとしていることである。

#### 2.4.5 箏の鑑賞

全身運動を続けて疲れた子ども達が一呼吸おきたいタイミングで箏の演奏を鑑賞するプログラムが入る。普段耳にしない箏の音色は乳幼児でも耳障りが良く中には眠気を催す子どもも見られた。しかしこうした子どもの反応も想定されており、鑑賞後には保護者と共にフロアに横になり寝てしまおうと促される。その間リーダーはタネから出た芽をセットする。一瞬ではあるが、寝るといふ行為が昼夜を過ごしたような時間の経過を演出しており、簡単にはタネから芽が出ないということを感じさせる効果的な工夫がなされている。

#### 2.4.6 ロックのリズムでダンス

少し顔を出した芽を引っ張り、子ども達も手拍子で応援する。引き抜かれた芽の先にじゃがいもがついていることを子ども達は発見し興奮する。そのような中、スリーコードの典型的なロック調のオリジナルソング『じゃがいもダンス』がピアノとカホンによって演奏される。リーダーの先導でロックのリズムに合わせて参加者全員でダンスに発展する。

物語を振り返りお別れのオリジナルソングで終演となった。

### 3. 東京文化会館ミュージックワークショップの特徴

ここでは、これまでにまとめた令和4年度の事業内容から考察し、東京文化会館ミュージック・ワークショップの特徴を以下にまとめたいと思う。Casa da musicaの育成プログラムで培ったリーダー達の指導技術は、リーダーのもとでの音楽の専門性を活かした上で、その専門性をもちいて、音楽の世界を共に楽しむように誘うもので、テキスト化や体系化されているものではない。本事業を継続的に展開し本学の教育に活かすためには、その特徴を明確にし、より豊かな音楽経験のために子どもに寄り添える力としたい。

一般的な音楽のワークショップは演奏技術や楽曲を理解するための知識を得る目的で行われる場合が多い。しかし東京文化会館ミュージックワークショップは「うまく演奏する」ためのものではなく、参加者自身が「音楽の楽しさを味わう」ことに主眼に置かれている。これは

先述の通り玉川学園の音楽教育の理念に通じる演奏者・学習者主体の音楽である。そのために明らかにわかる特徴は「参加性」である。一方的に知識や技術を伝授するのではなく、参加者が演奏に加わりアンサンブルの楽しさを味わう工夫が随所に見られた。その一つが一切楽譜を使用しないことである。ポスターや図を使用することはあるが、ほとんどがリーダーの口伝で成立する。それも参加者の発達段階を十分に配慮し、音域や難易度を十分に達成できるように教材を設定していた。しかも音楽の楽しさを絶対価値であるリズム・メロディ・ハーモニーに求めていることも大きな特徴である。そこで多用されるのが輪唱である。本学の校歌を作った岡本敏明は「かえるの合唱」を世に広め、「かえるの合唱主義で日本の音楽教育は180度転回できる」<sup>7)</sup>と言わしめるほどに輪唱を徴用していた。単純な一斉唱から拍節をずらすだけで豊かな合唱へと発展できるのが輪唱の素晴らしさである。ここにはリズム・メロディ・ハーモニーの三要素を含めたアンサンブルの楽しさが詰まっている。輪唱に限らずワークショップの内容には他者と合わせる楽しさを味わうプログラムが多く含まれていた。プロの演奏家と合わせるだけでなく、参加者同士が音によるコミュニケーションを通して一つの音楽を創り上げていくことは参加者を夢中にさせる大きな側面となっていた。また、リーダー達は極力参加者からのアイデアを引き出したり、創造的に関わる配慮が多く見られた。子ども達から自然に湧き起こる音や動作を発展させてプログラムを盛り立てている。特にその場の雰囲気や丁寧な汲み取り、参加者と対話的に進行するリーダーの力である。そのために先導者には指導力というよりも、応用力・随伴力の高さが求められる。また、どのようなアプローチがどのような反応につながるかという想像力も大変重要であると感じる。

東京文化会館ミュージックワークショップの特徴は「誰もが簡易に参加でき、それが豊かな音楽体験へ発展すること」「音楽の絶対価値から喜びが得られること」「皆で音を合わせる楽しさを味わうこと」であることがわかった。これからの課題は、こうした内容をリードしていく指導技術をどのように育成していくかである。今後も教育連携を継続し本学学生の音楽指導技術向上の一助としていきたい。

#### 謝辞

本研究論文の作成にあたり、ご協力いただき、写真な

どの使用についてのご承諾を賜りました東京文化会館事業企画課の皆様，ならびにワークショップリーダーの方々に深く感謝申し上げます。

#### 注

- 1) アンデス地域の振って音を出すシェイカーの一種。リヤマ・羊等のヒズメや木の実を紐で結んだ楽器。
- 2) インドのフィゴを動かして鳴らすハルモニウム的一种。鍵盤が付されたハルモニウムに対して，小蓋を操作して持続音を鳴らす特徴をもつ。
- 3) ドリア旋法とは教会旋法の一つ。正格第1旋法ともよばれる。音域はニー1点ニ音で終止音はニ音，支配音はイ音となる。
- 4) 一定の音を持続的に奏すること，またはその音。多くの場合最低音を奏するので持続低音とよばれる。
- 5) うすい金属版の両側に球がついた打楽器。効果音として使用されることが多く，金属板の端を押し下げると甲高いグリスサンド音が出る。
- 6) 西アフリカのマンデゴ族の太鼓。ドラブカ（タブラー）が伝わったもの。
- 7) 岡本敏明（1947）「新音楽教科に現れた諸傾向」『全人』7月号 玉川大学出版部 pp.14-15

#### 参考文献

- 海老澤敏・上参郷祐康・西岡信雄・山口修 監修（2006）『新編 音楽中辞典』音楽之友社  
 若林忠宏（2005）『世界の民族楽器』東京堂出版  
 民音音楽博物館 監修（2018）『世界の民族楽器図鑑』河出書房新社  
 浅香淳（1990）『新音楽辞典』音楽之友社